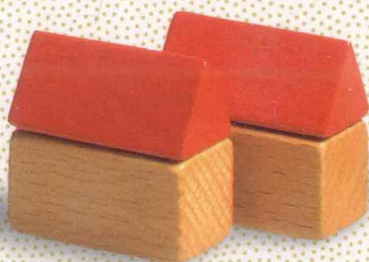


少年少女
日本文学館

17

ちいさこべ・山月記

*chiisakobe yamamoto shūgorō
sangetsuki nakajima atsushi*



山本周五郎

やまもと
しゅうごろう

中島敦

なかじま
あつし

ほか

少年少女
日本文学館

17

ちいさなへ・山月記

山本周五郎 中島敦^{*}

はか

講談社

山本周五郎 尾崎一雄 円地文子 中島 敦
木山捷平 永井龍男 原 民喜

少年少女日本文学館 17

ちいさこべ・山月記

講談社 1986

294 p 23cm

内容：ちいさこべ 虫のいろいろ 噴水（抄） 山月記 尋三の春
黒い御飯 胡桃割り とこやのいす 夏の花

やまもとしょうごろう おさきかずお えんちふみこ なかしまあつし きやましようへい
なかいなつお ほらたみき

少年少女日本文学館

第十七卷

ちいさこべ・山月記

定価 一四四〇円

(本体 一三九八円)

一九八六年十一月 十四日 第一刷発行

一九九〇年 二月二十八日 第四刷発行

著者……………山本周五郎 尾崎一雄 円地文子 中島 敦

木山捷平 永井龍男 原 民喜

発行者……………野間佐和子

発行所……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二二二二二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三) 九四五一一一(大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

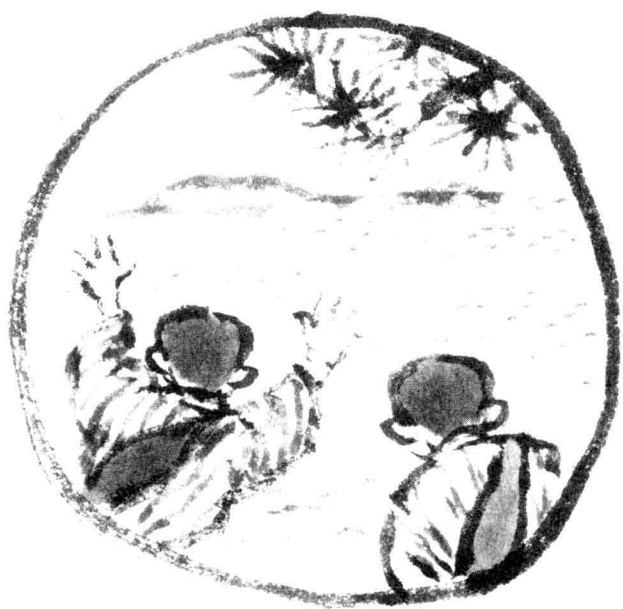
製本所……………黒柳製本株式会社

©清水 徹 尾崎松枝 富家素子 中島 桓 木山みさを

永井龍男 原時彦 一九八六年

著者・乱丁本は、小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にておとりかえし
ます。なおこの本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部にてお願いいたします。

も
く
じ



山月記 さんげつき	中島 敦 なかしま あつし	噴水 かんすい	銅像 どうぞう	摘草 つみくさ	噴水(抄) かんすい しやう	円地文子 えんぢふみこ	虫のいろいろ むし	尾崎一雄 おさきかずお	ちいさこべ	山本周五郎 やまもとしゅうごろう
.....										
141		135	126	117			95		9	



木山捷平
きやましやうへい

尋三の春
じんさん はる
.....
159

永井龍男
ながい たつお

黒い御飯
くろい ごはん
.....
191

胡桃割り
くるみわり
.....
200

とこやのいす
.....
220

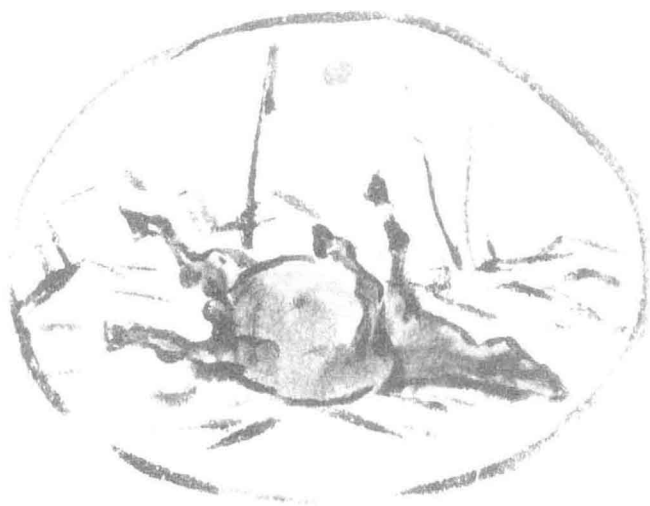
原民喜
はら なみき

夏の花
なつ はな
.....
235

● 解説
かいせつ
.....
266

● 随筆
ずいひつ
.....
275

● 略年譜
りやくねんぷ
.....
280



ちいさこべ
・ 山月記 さんげつき



山^{やま}本^{もと}周^{しゅう}五^ご郎^{ろう}

——
ちいさこへ



ちいさいへ

一

茂次は川越へ出仕事にいったので、その火事のことを知ったのは翌日の夕方であつた。当日の晩にもちよつと耳にした。川越侯（松平 直温）が在城なので、江戸邸から急報があつたのだらう、かなり大きく焼けているというはなしだった。江戸で育つた人間は火事には馴れているし、まだ九月になつたばかりなので、かくべつ気にもとめなかつた。

「九月の火事じゃあたいたこたあねえ」と正吉がいった、「もつともおれの留守に大きな火事がある筈はねえんだ」

いっしょに伴れて来た三人の中で、二十歳になる正吉は火事きちがいといわれていた。彼も「大

川越（九ページ）

武蔵国川越藩（現在の埼玉県）の城下町。酒井・松平氏のもとで小江戸とよばれて繁栄した。

松平 直温（九ページ）

江戸時代後期、文化年間の一時期、川越藩を治めた大名。二十二歳で死去した。

半鐘

小さな釣鐘。火事や津波などのときに打ち鳴らす。



料理茶屋

客室を設け、注文に応じて客に料理を出す店。料理屋。

「留」の子飼いの弟子であるが、十三、四のじぶんから火事が好きで、

半鐘の音を聞くとすぐにとびだしてゆく。大留の店は神田の岩井町

にあるが、遠近にお構いなしで、いちどは千住大橋の向こうまでと

んでゆき、明るる日の九時ごろに帰ったことがあった。

——火事があれば大工は儲かる、火事は大工の守り神だ。

などといって、親方の留造に殴られたこともあった。

その翌日のひる過ぎ、ちようど弁当をたべ終わったところへ、十

八になるくろがとびこんで来た。本名は九郎助であるし、べつに色

が黒いわけではないが、初めからくろと呼ばれている。彼は乗り継

ぎの早駕籠で来たのだそうで、「若棟梁にすぐ帰ってもらいたい」と、

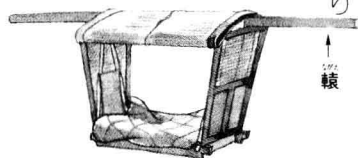
助二郎の伝言を告げた。

「仕事なかばに帰れるか」と茂次はいった、「いったいなんの用だ」

くろは言葉をごした。

茂次は父の留造の名代で来ている。この土地の「波津音」という

乗^のり継^つぎの早駕籠^{はやかご}
各地^{かち}の宿場^{しゆくば}におかれ、
宿場^{しゆくば}から宿場^{しゆくば}へ乗^のり
かえていく急ぎの
駕籠^{かご}のこと。駕籠
は、人^{ひと}のすわる部
分^{ぶん}の上に一本^{いっぽん}の轆^{りく}
を通^{とお}し、前後^{ぜんご}をか
ついで運^はぶ乗^のり物^{もの}。



左官^{さかん}
壁^{かべ}を塗^ぬる職人^{しよくにん}。
屋根屋^{やねや}
屋根^{やね}をふく職人^{しよくにん}。
建具屋^{たてぐい}
戸^{かど}・障子^{しょうじ}・襖^{ふすま}などをこしらえる
職人^{しよくにん}。

卒中^{そつちゆう}（二ページ）
脳血管^{のうけつかん}の障害^{しょうがい}のため、
突然意識^{とつぜんいしき}
を失^うつて倒^{たふ}れる病氣^{びやうき}。

料理茶屋^{りようぢやや}の普請^{ふしん}で、大留^{だいりゅう}がいっさいを請^うけ負^おった。左官^{さかん}、屋根屋^{やねや}、
建具屋^{たてぐい}なども江戸^{えど}から呼^よんだし、ほかに土地^{とち}の職人^{しよくにん}や追^おい廻^{まわ}しを十
雑用^{じゅうさつよう}をする者^{もの}つか
四^よ、五人^{ごにん}使^{つか}っている。茂次^{しげじ}の伴^つれて来^きた三人^{さんにん}のうち、大六^{だいろうく}は三十一
歳^{さい}になり、茂次^{しげじ}の後見^{こうけん}のような立場^{たちば}にいるが、これだけの仕事^{しごと}を大
六^{ろく}に押^おしつけて帰^{かえ}るわけにはいかない。いったいなんの用^{よう}だと訊^きき
直^{なお}そうとして、茂次^{しげじ}はふと、昨日^{きのう}の火事^{かじ}のことを思^{おも}いだした。

「おい」と茂次^{しげじ}がいった、「うちが焼^やけでもしたのか」

くろはあいまいに頷^{うなず}いた。

「うちが焼^やけたのか」と茂次^{しげじ}は声^{こえ}を高^{たか}くした、「おやじやおふくろは
無^む事^じか」

くろは黙^{だま}って頭^{あたま}を垂^たれた。茂次^{しげじ}は蒼^{あお}くなって大六^{だいろうく}を見た。大六^{だいろうく}が
立^たって来^きた。

「くろ」と大六^{だいろうく}がいった、「どうしたんだ、棟梁^{とうりやう}やおかみさんは無^む事^じ
なんだろう」

するとくろが泣きだした。

茂次しげじがとびかかろうとし、大六だいりくが危あぶなく抱きとめた。くろは腕うでで顔かおを掩おほい、子供こどものように声こえをあげて泣きだした。秋あきのまひるの、静しずかな普請場ふしんばにひびくくろの泣き声ごえは、そのままことの重大じゆうだいさを示しめすようで、みんな激はげしく圧倒あつとうされ、すぐには身動みうごきをする者ものもなかった。

「正吉しやうきち、若棟梁わかとうりやうを頼たのむぞ」と大六だいりくが穩おだやかにいった、「くろ、こっちへ来こい」

大六だいりくはくろを脇わきのほうへ伴つれていった。茂次しげじは木小屋きごやの前の材木まへに腰こしをかけた。彼かれの角張かくばった逞たくましい顔かおは、放心ほうしんしたように力を失うい、眼めはぼんやりとして、白く乾かわいた地面じめんを眺ながめるともなく眺ながめていた。おやじは死しんだな、と茂次しげじは心こころの中で思おもった。父ちちの留造とめぞうはその年としの四月がつに倒たおれ、寝ねたり起きたりという状態じようたいが続つづいていた。病氣びやうきはごく輕かるい卒中そつちゆうで、冬ふゆまでには必ず全快ぜんかいすると、三人さんにんの医者いしやがいった。

——火ひを見て二度ふためが来きたんだらう。

激はげしい動作どうさや心労しんろうが、二度ふための発作はつさを起おこしやすいいことはわかつていた。おそろく二度ふためが来たのであらう。おふくろはさぞ吃驚びっくりしたろうな、と彼は思おもった。情じようには脆もろいが、氣きの勝かつていた母ははは、四月がつに良人おつとが倒たおれたときすっかり動顛どうてんしてしまい、それ以来いらいひとが變かわつたように、引ひつ

込み思案（じあん）な、おどろきやすい性分（せいぶん）になった。茂次（しげじ）が川越（かわごえ）へ出仕事（でしごと）に来るときも、留守（るす）になにかあつたらどうしようかと、いかにも心ぼそ（こころぼそ）うにしていた姿（すがた）が眼（め）に残（のこ）っている。

——帰（かえ）らなくちやあならない。

母（はは）のためにもすぐ帰（かえ）ることにしよう、茂次（しげじ）がそう思（おも）っていると、大六（だいろく）が戻（もど）つて来た。

「若棟梁（わかとうりよう）、あつしは江戸（えど）へいつて来（き）ます」と大六（だいろく）がいった、「いや、あつしのほうがいい、若棟梁（わかとうりよう）は残（のこ）つておくんなさい」

「どういふことなんだ」

「詳しい事情（じじよう）はわからねえが、おまえさんのことだからはつきりいつちまう」と大六（だいろく）はまともに茂次（しげじ）をみつめながらいった、「——棟梁（とうりよう）もおかみさんも、いけなかったらしい」

茂次（しげじ）は、ぼんやりと大六（だいろく）を見（み）、それから、舌（した）がきかなくなりでもしたような口ぶり（くち）で、「おふくろも」と訊（き）き返（かえ）した。

「なんといふようもねえが」と大六（だいろく）は眼（め）を伏（ふ）せた、「そういうわけだから、ここはあつしがいくほうがいいと思う。若棟梁（わかとうりよう）はそれからにしたほうがいいと思うんだが」

茂次（しげじ）は黙（だま）っていた。大六（だいろく）は暫（しばら）く待（ま）っていたが、茂次（しげじ）は身動（みうご）きもしなかった。

「若棟梁」と大六が呼びかけた。

茂次は黙っていた。

「若棟梁」と大六はいった、「おまえさんしつかりしてくれなくちゃあ困りますぜ」

すると茂次は、とつぜん顔をあげて、どなった、「うるせえ、てめえこそしつかりしろ、おやじもおふくろも死んだとすれば、あと始末に手ぬかりがあると大留の名にかかわるぞ、そいつを忘れずにしつかりやって来い」

「へえ」と大六は頭を垂れた。

茂次は立ちあがって、「仕事にかかるぜ」と職人たちのほうへどなった。

大六はくろといっしよに江戸へゆき、五日めに戻って来て、茂次に仔細を告げた。

火事の起こったのは九月七日の午前十時。湯島天神の裏門前にある、牡丹長屋から出火し、北

西の風で三組町から神田明神へ延焼した。そのころから風勢が強くなり、そのまま神田をひと

めにして日本橋まで焼け、一方は東に延びて、堀江町、小網町、葺屋町の両芝居から、馬喰町、

浜町、そこで飛び火をして深川の熊井町、相川町、八幡宮の一の鳥居を焼き、仲町、辺りまで一

帯を灰にした。季節はずれなので大きくしてしまつたらしい、死傷者の数もかなり多いようである。